



日本語における直喩の写像方略の類型

小松原, 哲太
田丸, 歩実

(Citation)

日本認知言語学会論文集, 19:37-49

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008812>



日本語における直喩の写像方略の類型

小松原哲太（立命館大学）

田丸歩実（京都大学 [院]）

1. はじめに

概念メタファー理論 (Lakoff 1993) を中心として、比喩は、認知言語学の重要な研究対象でありつづけている。「人生は旅だ」という隠喩 (metaphor) に対して、「人生は旅のようなものだ」のように、比較や類似性を言語的に明示する指標をともなうものを直喩 (simile) という。英語を中心とした従来の多くの研究では、隠喩と対をなす限られた用例の観察にもとづいて、指標の有無という観点から直喩を一括して論じる傾向がある (e.g. Glucksberg and Keysar 1990, Barnden 2012)。日本語には「ようだ」「みたいだ」「ごとし」「むしろ」「なにか」「気がする」「全く変わるところがない」などのさまざまな指標があり、これらの指標は複雑に組み合わせられることが知られている (中村 1977)。直喩のなかですべての指標が同じ機能をもつわけではないし、ある指標がつねに同じ機能をもつわけでもない。この論文では、日本語の直喩の多様性に注目し、形式と機能の対応関係を考える構文論的なアプローチをとることによって、さまざまな直喩表現の共通項をボトムアップに抽出し、直喩における指標のはたらきを類型化することを試みる。この論文で用いるデータは、本研究のために文学作品から独自に収集された実例である。数多くの実例を一貫した手続きによって記述、分析することにより、内省による作例では見逃されがちな頻度の低い表現のパターンも記述対象となり、類型のなかに体系的に位置づけることができる。

論文の構成は以下の通りである。2 節では、これまでの研究アプローチの動向と限界を論じ、本研究の着眼点を示す。3 節では本研究の調査方法と結果を概説し、直喩の類型の全体像を示す。4 節では各類型をより深く掘り下げて論じる。5 節では、この論文の結論と展望を述べる。

2. 比喩の言語方略

直喩の研究には少なくとも、隠喩と比較するアプローチと、指標の多様性に注目するアプローチがある。まず、隠喩と直喩を比較するアプローチには、特に英語の *be* 動詞構文に焦点を当て、*my job is a jail* と *my job is like a jail* のようなペアを比べて、隠喩と直喩の共通性と差異を探る研究が数多くなされている (Glucksberg and Keysar 1990, Chiappe and Kennedy 2000, Bowdle and Gentner 2006, Glucksberg and Haught 2006, Barnden 2012)。例えば、Glucksberg and Keysar (1990) は解釈の差に注目し、隠喩は複雑で慣習化されたパターンが写像されるのに対し、直喩は限られた性質しか写像されないと主張している。また Bowdle and Gentner (2006) は慣習性という観点から、新奇的な比喩を表す場合は直喩が選択されると論じている。隠喩との比較研究では、直喩の心理的過程や修辭的効果の特性を深く分析できるという利点がある。しかしこのアプローチでは、指標の有無による差が明確になる特定の直喩だけに注意が向けられているため、取り上げられている例文は概して単純なものが多い。例えば、Barnden (2012) は、英語の *be* 動詞構文の比較にもとづく結

果から、隠喩と直喩の心理過程の違いを論じているが、この構文の分析が直喩一般の特性を明らかにしている保証は無い。

多様性の研究は、比較研究における包括性の欠落を補っている。日本語の直喩にはさまざまな種類の指標があることを記述する研究がある(中村 1977, 山梨 1988: 36-39, 鍋島 2016: 254-263, 鍋島・中野 2017, 小松原 2017)。さらに、Israel et al. (2004) や Goatly (2011: Ch. 6) によれば、英語の直喩にも、指標にかなりの多様性がある。直喩の多様性を研究する上では、指標をどのように分類するかが問題になる。中村 (1977) は、約 2 万の用例にもとづくこれまでで最大規模の記述調査であり、可能な範囲の比喩の指標形式のタイプとして、類似、同一、比較、混同、連想、強意、限定の 7 類を提案している(同書第 7 章第 3 節)。鍋島・中野 (2017) は、比喩が比較のプロセスを中心とした「比喩化のフレーム」を背景としていて考え、このフレームに含まれる「認識」「比較」「類似」「相違」などの要素が直喩の指標(鍋島・中野 (2017) では「メタファー明示表現」とどのように対応しているか(例えば、「ように」は類似に対応する)という観点から分類を行っている。鍋島・中野 (2017) のアプローチは、指標の語彙的・文法的機能をフレームの観点から整理するところに特徴がある。ただし、指標の包括的な分類が、直喩の機能の全容を解明することになるわけではない。直喩表現が全体としてもつ意味機能や修辭的効果が、指標によってどのように異なるのかということは、これまでの研究では詳しくは分かっていない。

直喩の指標が異なるならば、これに対応するかたちで直喩のはたらきに違いが出てくるのではないかと考えるのは自然である。小松原 (2012, 2016, 2017) は、異なる指標による機能の違いを考察している。興味深いことに、同じ指標でありながら、直喩表現における指標の役割が異なる (1) のような事例も存在する。例えば (1) の 2 例は同じ指標「のような」をもつが、指標がはたしている役割は異なる。(2) に示されているように、(1a) の「いらだたしさ」と「墨汁」は類似関係にあるのに対し、(1b) では「仕立屋」と「面持ち」が比較されているわけではない。(3) に示されるように、(1b) の指標は「仕立屋」が答える「面持ち」がまるで「哲学者」であることを示しているかのようだ、ということを表している。この違いは隠喩表現に縮約できるかという点にも反映される。(1a) は隠喩的縮約が可能で、(4a) のように「いらだたしさ」を「墨汁」で言い換えられるが、(4b) は不自然である。すなわち、(1a) の指標によって結ばれる概念は比喩的な対応関係にあるが、(1b) の概念間にそのような対応関係はない。以上のように、(1a) と (1b) において「のような」は異なる機能を担っている。

- (1) a. 心には墨汁のようないらだたしさが広がってゆくのだった。
b. 仕立屋は、哲学者のような面持ちで静かに答えた。
- (2) a. いらだたしさと墨汁は似ている。
b. ??面持ちと哲学者は似ている。
- (3) a. ??そのいらだたしさは墨汁であることを示している。
b. その面持ちは哲学者であることを示している。
- (4) a. 心には墨汁が広がってゆくのだった。
b. ??仕立屋は、哲学者で静かに答えた。

先行研究では、(1) のような現象の理論的な重要性は認識されてこなかった。従来の研究では基本的に、直喩の指標は、比喩的な対応関係、すなわち比喩写像 (metaphorical mapping; Lakoff 1993) を表すと考えられてきた。しかし (1b) のように、指標が直接的に表す関係と、比喩的な写像の関係が一致しないこともある。このことは、指標が写像の直接的な明示化を行う以外の機能を担うことがあることを示している。指標と写像の対応関係にどのようなパターンがあるかは、これまで知られていない。そこで、この論文では、指標が言語的に表している関係と、比喩伝達における概念的な写像関係との関係を**写像方略 (mapping strategy)** とよび、写像方略の類型を調査する。

本研究では、直喩を、比喩写像を構築する機能をもった、修辞性を喚起する (i.e. 表現が文字通りの意味でないことを示す) 指標をとみなす構文であると考え、隠喩だけでなく、直喩においても、概念間の写像が成立する。ただし、直喩表現にはさまざまな構文的パターンが存在し、指標がつねに直接的に写像関係を表すわけではない。指標をトリガーとして、どのようにして写像の理解と伝達が達成されるのかという観点に立つと、指標の有無という二値的な区分では捉えられない、写像構築にいたる認知的なプロセスの多様性がみえてくる。以下では、具体例の調査にもとづいて、写像方略からみた直喩の類型化を試みる。

3. 調査の方法と結果

本研究では『日本語レトリックコーパス』¹ に含まれる、多様な比喩指標をもつ日本文学のテキストにおける直喩の用例 711 例を調査対象とした。これらの用例は、著者らが立ち上げた研究プロジェクトで、独自に収集した実例である。711 例のうち、50 例は直喩とみなすことができるかどうかについて判断の揺れがあったため分析の対象とせず、残る 661 例に注目した。

この論文の目的は、指標の構造と写像構築の機能の対応関係から、直喩の構文的類型を考察することである。そのためには、直喩の構造と機能の特徴を調べる必要がある。3 節では、直喩に含まれる指標の構文的構造と、直喩が表す比喩的な意味機能の特徴の概要を記述する。続く 4 節では、直喩における形式と意味の対応関係を考察する。

第 1 に、形式的側面に注目した調査の概要を述べる。以下では、直喩表現に含まれる指標の実現形を「指標 (marker)」とよぶ。活用形が異なる指標は、異なる指標とみなす。例えば「ような」と「ように」は異なる指標とみなす。指標に含まれる接辞、語、連語を指標の「要素 (element)」とよぶ。例えば、指標「のようなもので」には要素「の」「ようだ」「もの」「で」が含まれる。また、指標「と全く変わるところがない」には要素「と」「全く」「変わる」「ところ」「が」「ない」が含まれる。表 1 は、本研究の調査対象で観察された指標の要素一覧を示している。

表 1: 指標の要素

<品詞>	<指標の要素>
副詞	あたかも、いかにも、一見、いわば、こう、さながら、さも、少しも、ただ、ちょうど、とんと、なお、ほとんど、まったく、まるで、むしろ、やや、よく、より [連語] そりゃ、なにか
動詞	怪しむ、ある、言う、疑う、思う、思える、変わる、感じる、考える、聞こえる、決まる、信じる、する、喩える、なる、似る、変じる、見える、見紛う、見る、類する
形容詞・形容動詞・連体詞	同じ、そっくりな、近い、不思議な、例の [連語] ありえない、一種の、(に)すぎない、(に)ほかならない
名詞	形、感じ、気、工合、心地、こと、自身、そのもの、それ、同列、とき、ところ、何、にせ、もの

助動詞	ごとし, じゃ, ず, そうだ, た, だ, です, ない, ぬ, べし, まい, みたいだ, ようだ, らしい [連語] だろう, である, なのだ
助詞	か, が, くらい, しか, すら, ぞ, て, で, ても, と, どこか, どころ, とも, に, の, は, ばかり, ほど, も, より, を [連語] ときたら, とすれば, にも
接辞	-的, -めく

対象としたデータには 195 個の指標のパターンが観察された。例として「ほとんど…かと思うほど」「かと疑われた」「と同じことで」「そりゃ…というもんで」「というような」「あたかも…ような工合に」「に聞こえる」「まるで…のように見える」「いわば…のような」「一種の…である」などが挙げられる。(紙幅の都合上、指標のパターン総覧は掲載しない。) 全パターンの 70.8%を占める 138 個のパターンで助動詞が含まれていた。

直喩の指標は、例えば「X はちょうど Y みたいなものだ」のように、基本的に 2 つの語句の関係を表す。X と Y を指標によって統語的に統合し比喩的な意味を表す表現のパターンを、以下では直喩の「構文 (construction)」とよぶ²。統語的にみると、直喩の構文は「X は Y のようだ」のように X について Y が叙述 (predication) するタイプと、「X のように Y」のように X が Y を修飾 (modification) するタイプに分けられる。以下では、叙述関係を X>Y、修飾関係を X-Y で表す (X と Y の順序は、用例における対応する語句の生起位置の順序を表す)。

直喩の典型例として挙げられる用例は、X と Y が同じ品詞であることが多い。例えば (1a) では X = 「墨汁」と Y = 「いらだたしさ」は両方名詞句である。しかし、X と Y が異なる品詞であることもある。この論文では、名詞句 N、動詞句 V、形容詞句・副詞句 A、節 C の 4 つの表記法を用いて、X と Y の品詞的特性を記述した。例えば「_N コウモリ)のように_V ひらひらと舞い上がる」は N-V となる。節 (clause; C) は主語と述語をとまなう言語単位であり品詞ではないが、例えば「_N 灰を落としたストーブ)のように、_C 彼女の顔には鮮やかな血がのぼった」のように、修飾句と主節の主語が明らかに異なる場合には N-C のように他の品詞的特性と同列に記述した。

以上の区分にもとづいて、論理的にあり得る構文型としては、修飾か叙述かによって 2 種類、X と Y の品詞的特性によってそれぞれ 4 種類をかけあわせて、計 2×2×4 種類が考えられる。しかし調査の結果、これらが一樣に分布しているわけではないことが分かった。まず、661 例中、指標が修飾関係を表す用例は 78.5%、叙述関係を表す用例は 21.5%であり、修飾関係を表す用例の頻度の方が高かった。次に、X と Y の品詞的特性が同じ用例は 40.1%、異なる用例は 59.9%であった。これについては全体としては大きな偏りは無いようにみえるが、品詞の異同を写像方略のタイプごとにみると、直喩の構文特徴にはかなり大きな偏りが観察された。(この結果は、表 3 とともに 4 節で記述する。)

第 2 に、意味的側面に注目した調査の概要を述べる。この論文では言語表現のプロファイルに注目する。構文を分析する認知文法の枠組み (Langacker 2008) では、文法や語彙の形式は何らかの概念をプロファイル (profile) する (i.e. 焦点化する) と考える。例えば、「X が Y を壊す」は基本的に、壊す主体 X (i.e. トラジェクター (trajector); tr) と壊される対象 Y (ランドマーク (landmark); lm) の関係をプロファイルする。この意味で、例えば「X は Y のようだ」のような直喩の構文も、X と Y が表す概念の何らかの関係をプロファイルすると言える。

直喩の典型例として挙げられる「宝石のような美しい瞳」といった例では、起点領域 (source

domain) の要素と目標領域 (target domain) の要素の写像関係が、指標となる文法形式によって明示的にプロファイルされる。しかし、調査したデータのなかには明らかにこの特徴をもたない例が見られた。そこで、典型例が備えている以下の 5 つの特徴に着目してデータを分析し、典型例とそれ以外の分類を試みた。(A) 指標がプロファイルする関係と写像関係が一致するかどうか、(B) 指標のプロファイルが異なるドメイン間の関係・同一のドメイン内の関係のどちらであるか、(C) 指標がプロファイルする叙述関係の述部または修飾関係の被修飾部が表す概念が起点領域・目標領域のどちらに属するか、(D) 目標領域の要素が言語化されているか、(E) 写像の根拠となる類似性が言語化されているか。(例えば、「宝石のような美しい瞳」では、(A) は一致し、(B) はドメイン間であり、(C) は目標領域であり、(D) は「瞳」と言語化されており、(E) は「美しい」と言語化されている。) 分析の結果、(A), (B), (C) の 3 つが有効な分類指標になることが分かった。それぞれの特徴を以下で説明する。

- (5) a. 「へえ…」と吐き出すように言った。[直接的]
- b. 鳥のように生きる。[間接的]
- (6) a. 墨汁のようないらだたしさ [ドメイン間]
- b. 哲学者のような面持ち [ドメイン内]
- (7) a. 批判が棘のようにチクチクと刺す [起点領域]
- b. 狐が風のように走り出した [目標領域]

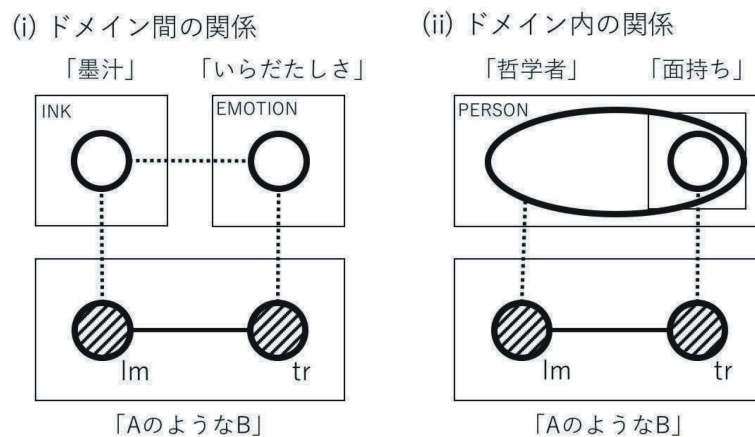


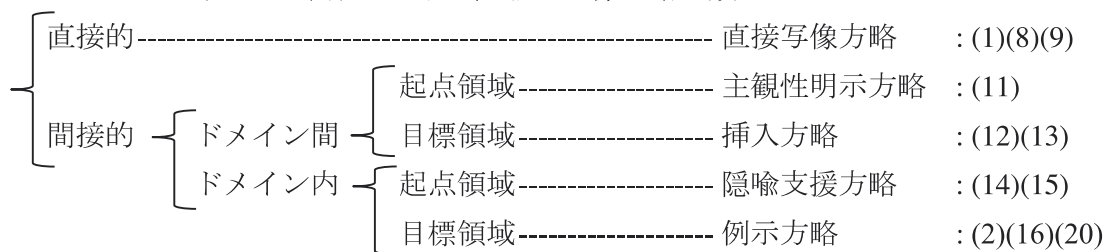
図 1: 指標のプロファイル

特徴 (A) は、写像構築が直接的か間接的かを示す。(5a) では、比喩の関係にある「吐き出す」と「言った」が指標「ように」によって修飾関係で結ばれているため直接的である。これに対して、(5b) では修飾部の「鳥」それ自体ではなく、鳥の生き方が人の「生きる」様と対応するので、対応関係は間接的である。特徴 (B) は、指標のプロファイルが異なるドメイン間の関係であるかどうかを示す。(6a) では「墨汁」は物理的なものであり、「いらだたしさ」は精神的なものであるため、両者は明らかに概念のドメインが異なる。図 1 (i) の上部の 2 つのボックスをまたぐ点線は、(6a) が表す異なるドメイン間の比喩的な対応関係を示している。これに対して、(6b) の「哲学者」

と「面持ち」は、どちらも人のドメインがベースである。(6b)の指標「のような」は同一ドメイン内の部分全体関係をプロファイルしていると言える(図1(ii))。特徴(C)は、修飾関係における被修飾部、ないしは叙述関係における述部が表す概念が、起点領域・目標領域のどちらに属するかを示す。(7a)の修飾部「棘のように」を取り去ってみると「批判がチクチクと刺す」となり、これは隠喩表現である。(7a)の起点領域は植物、目標領域は言語であるが、被修飾部「チクチクと刺す」が表すのは起点領域に属する概念である。これに対して(7b)の起点領域は自然、目標領域は動物であるが、「風のように走り出した」における被修飾部「走り出した」が表すのは目標領域に属する概念であると言える。

日本語における直喩の写像方略について、(A)(B)(C)を弁別特徴とする表2の類型を提案する。括弧内の数字は、主な用例を示している。それぞれの方略の特徴については4節で詳説する。

表2: 日本語における直喩の写像方略の類型



4. 直喩の写像方略の類型

3節では、直喩の構造と機能の特徴を記述した。表2に示す写像方略の機能的な類型は、直喩の構文型とどのように対応するのだろうか。表3は各方略の用例数と構文特徴の概略を表している。

表3: 写像方略における指標の構造的特徴

		用例数	修飾関係 (X-Y)	叙述関係 (X>Y)	品詞的特性 一致率(%)
直接写像方略		256	143	113	88.4
間接 写像 方略	主観性明示方略	19	1	18	21.1
	挿入方略	57	57	0	35.2
	隠喩支援方略	30	29	1	30.0
	例示方略	299	289	10	26.0
合計		661	519	142	

本研究では、以下の2つの理由から、指標のプロファイルと写像関係が一致するかどうかによって、直接写像方略と間接写像(indirect mapping)方略をまず分ける。第1に、両者は理論的に区別される。指標のプロファイルと写像関係が一致しないパターンは、指標が写像を明示するという従来の研究の想定(ないしは前提)から外れるためである。第2に、両者は分布的にも違いが見られる。直接写像方略は品詞的特性の一致率がきわめて高いのに対し、間接写像方略は一致率が低い。全661例中の方略ごとの品詞一致率が表3に示されている。品詞的特性は、例えばN-Nであれば一致、N-Vであれば不一致である。

以下では、具体例を示しながら各方略の特徴をより詳しく記述する。

4.1. 直接写像方略

直接写像 (direct mapping) 方略では、指標のプロファイルと比喻の写像関係が一致する。直接写像方略の用例数は 256 例であり、全用例の 37.3%を占める。多数を占める直喩の構文構造は、N>N (100), N-N (85), V-V (25) であった (括弧内の数字は用例数を示す)。この方略は、指標によって結合される言語単位の品詞的特性の一致率が、他の方略と比較して際立って高い (88.4%) という特徴をもつ。

- (8) もう山焼けの火はたばこの吸殻のくらいにしか見えません。(宮沢賢治「よだかの星」:44)
- (9) 七葉樹には飾燈かざりとうのような美しい花が咲いていました。(梶井基次郎「橡の花」:250)
- (10) 歩くたびに長い縮緬ちりめんの腰巻の裾は、じゃれるように脚へ縛もつれる。(谷崎潤一郎「秘密」:34)

この方略を用いた直喩の例を (8)(9)(10) に示す。(8) の指標は N>N の構造をもち、「山焼けの火」で「たばこの吸殻の [火]」を喩える写像関係が「くらいにしか見えません」という視覚的な対応づけを表す指標によって直接的に言語化されている。(9) の直喩の構文「X のような Y」は N-N の構造をもち、(10) の「X ように Y」は V-V の構造をもつが、ともに直喩の構文が比喻の写像関係を直接的に表している。

4.2. 間接写像方略の類型

間接写像方略は、直喩の構文がプロファイルする関係のドメインの特徴によって、拡張方略と精緻化方略に分かれる。拡張 (extension) 方略は、異なるドメイン間の関係をプロファイルする方略である。用例数は 76 例であり全体の 11.5%を占める。拡張方略は、概念メタファー理論が重視するドメイン間 (cross-domain) の関係を表す。異なる 2 つの概念的なドメインを関係づけるという点で、直喩の構文は比喩的な意味拡張に関与する。拡張方略はさらに、主観性明示方略 (4.3 節) と挿入方略 (4.4 節) に分かれる。精緻化 (elaboration) 方略は、同一のドメイン内の関係をプロファイルする。用例数は 329 例であり全用例の 49.8%を占める。精緻化方略の直喩には、起点領域や目標領域の概念をより詳しく精緻化する (i.e. 具体化する) という特徴がある。指標は直接的には意味拡張に関与していないという点で、拡張方略よりも間接性は高い。精緻化方略は、隠喩支援方略 (4.5 節) と例示方略 (4.6 節) に分かれる。拡張方略、精緻化方略の両方において、修飾関係の被修飾部ないしは叙述関係の述部の隠喩性が、下位方略を区分する弁別特徴になっている。

4.3. 主観性明示方略

拡張方略の特徴は、直喩の構文がドメイン間の関係を表すということである。この点では、直接写像方略の特徴と部分的に重なっている。主観性明示 (explicit subjectivity) 方略は、拡張方略の 1 つであり、直喩の構文が表す修飾関係の被修飾部、ないしは叙述関係の述部が起点領域の要素を表すものをいう。用例数は 19 例で全用例の 2.8%を占め、この調査では最も低い頻度の方略である。多数を占める指標構造は、N>V (14)、N>N (3) であった。19 例中 18 例が叙述構文であり、この分布は他の方略との際だった差になっている。

- (11) 「何じゃ、この鼻赤めが。」五位はこの語が自分の顔を打ったように感じた。

(芥川龍之介「芋粥」:56)

主観性明示方略の直喩の構文は、多くが叙述的な隠喩表現に指標を付け加えたような形式をもつ。例えば (11) の指標「ように感じた」を取り去ると「この語が自分の顔を打った」という隠喩になる。(11) では、「顔を打った」という身体的経験と比喩的に対応しているのは、言葉が心に響いたという心理的経験であるが、この 2 つの経験の関係は言語化されておらず、あくまで間接的に理解されるという点が (8) のような直接写像方略とは異なる。「X が Y ように感じた」という指標は、比喩関係それ自体ではなく、X に対する Y の比喩的な叙述が主観的な感じ方にもとづいていることを明示していると解釈できる。

4.4. 挿入方略

拡張方略のもう 1 つの下位方略である挿入 (parenthesis) 方略は、直喩の構文が表す修飾関係の被修飾部ないしは叙述関係の述部が目標領域の要素を表す。用例数は 57 例で全用例の 8.3% を占める。多数を占める指標構造は、N-V (22)、N-N (12)、V-V (7)、C-N (7) であり、全例が修飾構文の用例であった。主観性明示方略のほとんどが叙述構文であったことと合わせて考えると、拡張方略の下位機能は、直喩の構文によってほぼ予測されると言える。

(12) 狐は、頭をめぐらすと、また枯薄かれすすきの中を、風のように走り出した。

(芥川龍之介「芋粥」: 71)

(13) いわばここは彼女の待避所で、そういう時には大概隣家でオサヨさんオサヨさんとよぶ婆さんの鳥類か的叫びが起り (…)。 (坂口安吾「白痴」: 253)

挿入方略の例を (12)(13) に示す。例えば (13) の比喩的な修飾句「X 的な」を取り去ると、「婆さんの叫びが起り」という文字通りの表現が得られる。この意味で挿入方略の直喩は“括弧に入れる”ことができる比喩である。挿入方略は、比喩的な説明を挿入句的に組み込むことで、文字通りの文脈に異なるイメージを持ち込む表現方略であるといえる。

4.5. 隠喩支援方略

精緻化方略の直喩は、起点領域もしくは目標領域の概念を具体化する機能をもつ。精緻化方略の 1 つである隠喩支援 (metaphor support) 方略は、起点領域の概念を具体化する。用例数は 30 例で全用例の 4.4% を占める。多数を占める指標構造は、N-V (16)、N-N (5) であり、30 例中 29 例が修飾構文の用例であった。

(14) (…) マントの蔭からしなやかな手をちらちらと、魚のように泳がせているあでやかさ。

(谷崎潤一郎「秘密」: 40)

(15) 彼は性の悪い牡蠣のごとく書齋に吸い付いて、かつて外界に向って口を開いた事がない。

(夏目漱石「吾輩は猫である」: 229)

構造的にみると、品詞的特性と修飾・叙述の分布は挿入方略に近い。機能的にみても、挿入方略と隠喩支援方略は似ている。(14) における「魚のように」の機能は、手を「泳がせ」という隠喩の内容を精緻化しイメージを具体化することである。(15) では「彼は {牡蠣のごとく / ??φ}

書齋に吸い付いて」という適切性の差から分かるように、新奇的で理解しにくい隠喩に、起点領域の概念を例示する修飾部が付加されることでイメージが具体化されている。挿入方略は、文字通りの表現を比喩的に装飾するのに対して、隠喩支援方略は、比喩的な意味をもつ表現に同じドメインの概念を付け加えることで具体化し、いわば隠喩を支援し、理解しやすくするはたらきをになっているといえる。

4.6. 例示方略

例示 (illustration) 方略は、精緻化方略の下位方略であり、直喩の構文が表す修飾関係の被修飾部ないしは叙述関係の述部が表す目標領域の概念を具体化する。用例数は 299 例で全用例の 43.6% を占める。この調査では、直喩の典型例であると考えられてきた直接写像方略の用例数をのしている。多数を占める指標構造は、N-V (117)、N-N (46)、N-A (42)、V-N (35)、V-V (20)、C-N (15) であり、例示方略の 96.7% が修飾構文の用例であった。

(16) 校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。(夏目漱石「坊ちゃん」:31)

(17) 「知らんがナ……」と云い云いふり仰ぐお八重の笑顔は、女神のように美しく無邪気であった。(夢野久作「いなか、の、じけん」:61)

例示方略は、目標領域の概念がもつ性質や特徴、より正確には、比喩の根拠になる起点領域と目標領域の共通要素を具体化する。例えば (16) は「校長」が「狸」に喩えられているが、目標領域である校長の目に焦点が当てられ、その目が「狸」を例に比喩的に説明されている³。さらにこの眼の比喩を介して、人間 (i.e. 校長) が動物 (i.e. 狸) と間接的に対応づけられる。(17) では「お八重の笑顔」が「美しく無邪気であった」様を説明するために「女神」を引き合いに出すことで美しさを具体化している。結果的に「女神」は「お八重」の比喩として理解される。(16) や (17) では、統語的に直接結合されているのは、起点領域の要素を表す語句と、目標領域と起点領域の比較の着眼点を表す語句である。それにもかかわらず、意味解釈の上では、主題や修飾部に含まれる名詞句が表す概念間に写像関係 (i.e. 校長=狸、お八重=女神) が構築されている。

この論文では「例示」という用語を広い意味で用いる。狭い意味では、例示はカテゴリーの成員を例として示すことをいう。例えば「バナナのような果物」では、バナナが果物というカテゴリーの成員であるという点で、バナナは果物の例である。(16) の「狸のような眼」では狸が眼というカテゴリーの成員であるというわけではないが、これは“狸の眼のような眼”という意味で理解できる。このように、修飾部 X と被修飾部 Y について、X の Y という側面が Y の例である場合も、一種の「例示」とみなす。同様の例としては「猿のような顔」「レモンのような匂い」「宝石のような美しさ」等が挙げられる。(18) では「金粉」の「きらめく」という側面が、葉のきらめきの例になっている。同様の分析は (19) にも適用できる。

(18) そうしてその葉が、峰と峰との裂け目から^{たにあ}溢れ込む光線の中を、ときどき金粉のようにきらめきつつ水に落ちる。(谷崎潤一郎「吉野葛」:234)

(19) さーっと鏡の中の顔が消えて、あぶり出しのようにまた現われたりする。

(梶井基次郎「泥濘」:211)

(20) では、形容しがたい「微笑」の様相を、架空の物語的設定を例に出すことで具体化している。ここでは「悪戯」や「年長者」といった要素に対応する要素が目標領域に見つからなくとも、(20) の比喩は理解できる⁴。この点で、(20) の比喩の主な目的は「微笑」の知覚的なイメージを具体化することであると考えられることができる。(21) では、形容しがたい「気持ち」が「南京花火」のイメージによって具体化されている。

(20) ^{としひと}利仁は微笑した。悪戯をして、それを見つけれそうになった子供が、年長者に向ってするような微笑である。(芥川龍之介「芋粥」:65)

(21) (…) 今にもポンポンパリパリと破裂しちまいそうな南京花火みてえな^{なんきん}気もちになっちまいましたね。(夢野久作「人間腸詰」:376)

例示方略には、(20)(21) のように起点領域の要素を複雑な修飾表現によって表現することで、被修飾部が表す具体性の低い目標領域の要素を、比喩的なイメージによって豊かに拡張する用例が多く観察される。(21) では「{ 南京花火みてえな / ??φ } 気持ちになっちまいましたね」のように、比喩的な修飾部を取り去ると不自然になる。同様の特徴は、「形」「声」「面持ち」「姿」「面影」「格好」などの知覚的なイメージを具体化する用例や、「意気込み」「心もち」「思い」「感じ」などの心理状態を具体化する用例にもみられた。この種の用例では、喩えられているイメージや心理状態は直接的に把握しにくい。つまり、写像先である目標領域には対応づけるべき要素が多くは存在せず、比喩的な例示によってはじめて目標領域要素の概念化が進むように思われる。この点では、例示方略は目標領域と起点領域を明示的に対応づける直接写像方略とは、大きく異なる特徴をもつといえる。

5. おわりに

この論文では、直喩の指標が言語的に表す関係と、比喩的な写像関係との対応関係に注目し、写像方略という観点から、日本語における直喩の類型化を試みた。写像方略の種類の全体像は表 2 にまとめられる。これまでの研究では、直喩は基本的に、比喩的な写像関係を明示するものであると考えられてきた。しかし、本研究の調査から、直接的に比喩を明示する「直接写像方略」が圧倒的多数を占めるわけではなく、「例示方略」などの他の方略がかなりの割合で含まれることが分かった。「隠喩支援方略」のように、直喩の指標は隠喩を分かりやすくするために補助的に用いられる場合もあるが、その割合は比較的小さかった。それに対して、(20)(21) のような例示方略の用例では、比喩的な修飾部がいわば必然的に用いられることを論じた。

表 2 の類型は、文学テキストから収集された限られた用例にもとづく一般化であり、写像方略のタイプが網羅されているかどうかは分からない。しかし、少なくとも表 2 は、直接写像方略とは別に、多様な間接写像方略が存在することを示している。特に例示方略は直接写像方略よりも用例数が多く、質的にも多様であるため、より詳しい分析がまたれる。比喩の写像は、色々な言語的方略によって達成される。この事実は、比喩写像の構築メカニズムの全容を解明するためには、直喩の体系的な研究が必要であることを示唆している。

注

1. 著者らは、2017 年から『日本語レトリックコーパス構築プロジェクト』を立ち上げ、修辞表現の用例コーパスを作成している。このコーパスの特徴としては、第 1 に、典拠のある日本語の文学テキストから修辞性の高い用例が無作為に抽出されていること、第 2 に、言語学および修辞学的な基準にもとづいてアノテーションが付与されていることが挙げられる。現時点で、隠喩、直喩、換喩、提喩などを含む約 2,300 例が収集分析されている。
2. この論文では「構文」という用語は、形式と意味の対という一般的な意味で用いる。具体的には、「直喩の構文」という表現で、直喩表現の構造的パターンと比喩的な意味を表す機能の対を表す。構文を主な記述対象とする点では、本研究は構文文法 (e.g. Fillmore 1988, Goldberg 1995) と同じ立場であるが、この論文では特定の構文文法理論を記述のフレームワークとするわけではない。
3. 本研究では、例示的な意味と比喩的な意味は両立すると考える。同じ例示であっても、例えば「バナナのような果物」には比喩の効果は認められないが、「ナイチンゲールのような人」には人柄や振る舞いを比喩的に描写する効果が認められる。例示と比喩の意味が両立すると考える立場の研究としては、安田 (1997) も参照。
4. 芥川龍之介の「芋粥」の前後文脈をみると、「利仁」が目的地を伏せたまま主人公の五位を連れて歩くという状況で、(20) の比喩は、いぶかしむ五位に対する利仁の様子を描写している。この文脈を考慮すると、「悪戯」は利仁の企てに対応し「年長者」は五位に対応すると解釈できる。(ただし、五位よりも身分の高い利仁の行動が、大人に対する子供の悪戯として喩えられているところに修辞性が認められる。) このように、コンテキストの情報を考慮すると、間接的な写像関係を精査し、より深く概念的な関係を読み込むことも可能である。それと同時に、(20) はこの種の読み込みをしなくとも、矛盾無く理解することができる。この意味で、(20) では比喩の段階的な理解が可能である。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 (JP17K13451) の助成を受けている。データの収集と分析に関して、『日本語レトリックコーパス構築プロジェクト』のメンバーとして京都大学の井上拓也氏、井上優大氏、春日悠生氏、神原一帆氏、佐藤雅也氏の協力を得ることができた。本論文の考察の一部は、JCLA19 の口頭発表、および語用論学会メタファー研究会の研究発表における議論にもとづいている。また執筆にあたり、草稿に中央大学の菊地礼氏から建設的なコメントをいただいた。記して感謝申し上げたい。

引用例出典

- 芥川龍之介「芋粥」 (ちくま日本文学『芥川龍之介』: 49-82, 東京: 筑摩書房, 2007)
梶井基次郎「泥凜」 (ちくま日本文学『梶井基次郎』: 207-222, 東京: 筑摩書房, 2008)
坂口安吾「白痴」 (ちくま日本文学『坂口安吾』: 245-290, 東京: 筑摩書房, 2008)
谷崎潤一郎「吉野葛」 (ちくま日本文学『谷崎潤一郎』: 214-290, 東京: 筑摩書房, 2008)
谷崎潤一郎「秘密」 (ちくま日本文学『谷崎潤一郎』: 24-54, 東京: 筑摩書房, 2008)
夏目漱石「吾輩は猫である」 (ちくま日本文学『夏目漱石』: 202-311, 東京: 筑摩書房, 2008)
夏目漱石「坊ちゃん」 (ちくま日本文学『夏目漱石』: 9-201, 東京: 筑摩書房, 2008)

夢野久作「いなか、の、じけん」（『夢野久作全集1』：47-85, 東京: 三一書房, 1969)

夢野久作「人間腸詰」（ちくま日本文学『夢野久作』：361-406, 東京: 筑摩書房, 2009)

参考文献

Barnden, John A. 2012. Metaphor and Simile: Fallacies Concerning Comparison, Ellipsis, and Interparaphrase. *Metaphor and Symbol* 27(4): 265-282.

Chiappe, Dan L, and John M. Kennedy. 2000. Are Metaphors Elliptical Similes? *Journal of Psycholinguistic Research* 29(4): 371-398.

Fillmore, Charles J. 1988. The Mechanisms of “Construction Grammar”. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 33-55.

Glucksberg, Sam, and Boaz Keysar. 1990. Understanding Metaphorical Comparisons: Beyond Similarity. *Psychological Review* 97(1): 3-18.

Glucksberg, Sam, and Catrinel Haught. 2006. On the Relation between Metaphor and Simile: When Comparison Fails. *Mind & Language* 21(3): 360-378.

Goatly, Andrew. 2011. *The Language of Metaphors*. 2nd edition. New York: Routledge.

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

Israel, Michael, Jennifer Riddle Harding, and Vera Tobin. 2004. On Simile. in Achard, Michel, and Suzanne Kemmer eds. *Language, Culture and Mind*: 123-135. Stanford: CSLI Publications.

Lakoff, George. 1993. The Contemporary Theory of Metaphor. in Ortony, Andrew ed. *Metaphor and Thought*. 2nd edition.: 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.

小松原哲太. 2012. 「直喩の二側面と修辭的効果の二つのタイプ—助動詞『ようだ』に関する事例分析—」『言語科学論集』18: 1-25.

小松原哲太. 2016. 『レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学—』 京都: 京都大学学術出版会.

小松原哲太. 2017. 「比喩を導入する構文としての直喩の語用論的機能」加藤重弘・滝浦真人（編）『日本語語用論フォーラム2』：47-73. 東京: ひつじ書房.

中村明. 1977. 『比喩表現の理論と分類』 東京: 秀英出版.

鍋島弘治朗. 2016. 『メタファーと身体性』 東京: ひつじ書房.

鍋島弘治朗・中野阿佐子. 2017. 「シミリとメタファーの境界—シミリを導入する表現の分類に関する一考察—」 *KLS* 37: 121-132.

安田芳子. 1997. 「連体修飾形式『ような』における<例示>の意味の現れ」『日本語教育』92: 177-188.

山梨正明. 1988. 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版会.

Mapping Strategies of Simile in Japanese

Tetsuta Komatsubara (Ritsumeikan University)

Ayumi Tamaru (Kyoto University)

A simile is a construction that involves metaphorical interpretation with a linguistic marker, which separates simile from metaphor. A typical example of simile takes the form of *A is like B*, and the mapping is achieved by the marker *like*. In *my job is like a jail* (Glucksberg and Keysar 1990), for instance, *JAIL* corresponds to *JOB* metaphorically by the marker. The previous studies have focused on the case in which a marker directly expresses the mapping relation. However, this paper argues that there is another type of simile in which a marker triggers the mapping indirectly. For example, in *he has a face like a philosopher*, his *FACE* is not mapped onto *PHILOSOPHER* itself but a part (i.e. face) of *PHILOSOPHER*. The mapping relation between two faces is not manifested syntactically but comprehended semantically. The purpose of this paper is to describe how we can reach the metaphorical interpretation by a linguistic marker of simile. 661 examples were extracted from Japanese literary texts and analyzed in terms of syntactic relations, parts of speech, and profiles (Langacker 2008) of markers of simile in the source and target domains. We defined a “mapping strategy” of simile as a pattern of rhetorical use of a linguistic marker to trigger a mapping between the source and target domains. Mapping strategies of simile are divided into the direct and indirect strategies, and the latter includes four subtypes: the explicit subjectivity strategy, the parenthesis strategy, the metaphor support strategy, and the illustration strategy. Surprisingly, the illustration strategy was more frequently observed than the direct mapping strategy, which has been considered to be the prototype of simile. Simile is not homogeneous syntactically and semantically. A marker of simile is not merely a formal marker but a linguistic device to guide us to the conceptual mapping.